

哲学入門 予習プリント[自然観中心](月3)【      】穴埋めの解答

- 1 無限定
- 2 ログス
- 3 存在
- 4 原子
- 5 無知
- 6 イデア
- 7 ボリス
- 8 ストア
- 9 善一者
- 10 三位
- 11 形而
- 12 意志
- 13 普遍
- 14 唯物
- 15 永劫
- 16 脚本

(第一講座～第四講座まとめ) レポート(1)タスク[あ]の範囲 ①万物の根源を考える ②エレア派と古代原子論

③正義をめぐって—ソクラテス対トラシマコス ④アリストテレスの目的論的自然観

①**タレス**は大地(地球)は湧き出る水のカで、宇宙空間内を支えられているとの発想から、宇宙万物の根源を水であるとした。**アナクシマンドロス**の言う【1 \_\_\_\_\_ なもの】や**アナクシメネス**の「気」も、宇宙の根本素材として考えられたものである。**ヘラクレイトス**は万物流転の考えを示しつつ、宇宙の生成を、火による燃焼と、熱による水の循環としてとらえる。生あるもののそれぞれが、適切な火と水の配分・比率(【2 \_\_\_\_\_】)をわきまえることが善く生きることである。／②**パルメニデス**は「あるはあり、あらぬはあらぬ」と言う。つまり、あるものがあらぬものになったり、あらぬものがあるものになったりすることはないがゆえに、真に【3 \_\_\_\_\_】するもの＝実在は生成消滅や性質的变化、運動等を一切含まない完全で不変不動のもので、知性によってのみとらえられ、感覚には現れないとした。**古代原子論者**はパルメニデスの発想に倣い、それ自体は色、味、熱さ等の感覚に現われる性質を一切もたないが、相互に組み替わって諸性質を現す窮極最小の構成要素として【4 \_\_\_\_\_】(アトム)というものを考えた。／③**ソクラテス**は、人間にとって「善悪のみきわめ」こそが大切だと考え、「正義とは何か」「幸福とは何か」といった倫理的問題を、「知者」だとみなされている人々との対話の中で徹底的に問い、結果お互い無知であることがわかり、その【5 \_\_\_\_\_ の知】のうえにさらなる論理的探求を続けた。その考えを受け継ぎ、**プラトン**はソクラテスが問うた物事の本質を【6 \_\_\_\_\_】としてとらえ直した。プラトンのイデアは、ソクラテスが求めていた、生き方の規範となる根本的な知の中核となるものである。また、パルメニデス以来の「真に存在するものは不変不滅である」との基本思想に合致する、永遠性をもつ真理でもある。イデアは外から教えられる概念ではなく、教育的手ほどきのもと、我々が自らの内に見出すものである。／④**プラトン**は哲学的対話で「イデア＝数々の善き行為に共通する善さ、徳の本質」を把握し、厳格に実行に移す強きこそ道徳の要であり、国家の指導者に必要な資質であることを強調した。彼の弟子**アリストテレス**の関心は、社会の中でのお互いの友愛的な結びつきと、その心を育む性格形成の方に幾分シフトしている。「よろこぶべきものをよろこび、苦しむべきものを苦しむ」ように性格形成することが真の教育だと言う。アリストテレスは「人間は【7 \_\_\_\_\_】(都市国家)を作る自然本性がある」とし、社会の中で自らにふさわしき役割を果たし、行為選択の際は熟慮して、自らの行為の結果に責任をもつことが有徳であるとした。

(第六講座～第九講座まとめ) レポート(2)タスク[あ]の範囲

⑥エピクロスとストア派の自然観 ⑦プロティノスの宇宙観—プラトン主義者として ⑧哲学と宗教—フィチーノ

⑥**プラトン**や**アリストテレス**が、善をわきまえ道徳的行為をなすことを幸福の要としたのに対し、**エピクロス**は苦痛のない平穏な快の感覚が持続することこそ幸福であるとした。快を求め苦を避ける感覚を自然体で備えているのは赤ん坊であり、赤ん坊の方がむしろ余計な知識や価値観に縛られた大人より自然そのものの価値を理解しているとされる。一方で、「ストイック」の語源となる【8 \_\_\_\_\_ 派】の人々は、赤ん坊が転んでも転んでも立ち上がるように、直接には苦痛なことであっても「自らにふさわしきことをなす」のが人間の自然本性であるとする。彼らは禁欲的で自制的な実践を説き、常に理性に従う安定した心のあり方こそが幸福だとみなす。／⑦イデア論に立つ**プラトン主義**の新潮流(**新プラトン主義**)の祖となる**プロティノス**は、プラトンのイデア論の頂点にあり、太陽に喩えられる「善のイデア」を、万物に存在を与える源である【9 \_\_\_\_\_】としてとらえなおす。「善一者」は言葉や形で説明できるものではなく、我々の魂の奥深くに発見することができるものである。我がうちに自らの源を見つめる善き「知性」があることを知ることが「幸福」である。われわれには直接に接したり意識したりすることのないはるか遠くの存在と「共感」することができる。自分だけがよくなるだけでなく、全宇宙のあらゆる存在を考慮に入れて生きるのが真に知性ある者の姿である。⑧「子なる神」**イエス(キリスト)**が罪深き我々に替わって十字架にかかり、それによって「父なる神の救い」が、「聖霊」の働きを通じて我々の魂にもたらされるとの【10 \_\_\_\_\_ 一体】のキリスト教の教義を体系化した哲学者が**アウグスティヌス**である。ルネサンス期に活動した**フィチーノ**はアウグスティヌスの影響を受けつつ、「本来罪深い者」というキリスト教の人間観は受け継がず、人間は神を自然本性的に愛するとし、神への愛によってそれぞれの自然本性に応じた場に配置されるとした。魂を、本来的に善につながるとした点では、フィチーノはむしろ**プロティノス**の後継者であると言える。フィチーノは、神的な最高善を目標としている点で、哲学と宗教は姉妹であるとする画期的な説を唱える。

(第十講座～第十四講座まとめ) レポート(3)タスク[あ]の範囲 ⑩デカルトの真理観 ⑪理性的存在者としての人間—カント ⑬唯物論的自然観—エルヴェシウスとマルクス ⑭物語の主体としての自己—マッキンタイア

⑩神や精神等、形としては見えない領域の事柄を根源的存在とみなし探求する学を、【11 \_\_\_\_\_ 上学】と言うが、**デカルト**はそれを全学問の根本とみなし、形而上学の確かな出発点を見出すため、少しでも疑う余地のある事柄は偽として退けた。こうした徹底的懐疑によっても疑い得ないものが疑う我、「考える我」の存在であった。「考える我」が自然界をめぐる事柄について、細部にいたるまで不明瞭な点を残さず緻密に認識することで真理が得られ、主要学問(自然科学、医学、機械工学)の完全な知識を前提として、「完全な道徳」が獲得できる。／⑪**カント**もデカルト同様、道徳の獲得こそを生きる最大目的としたが、学問知を前提として道徳を語るのではなく、「我々の意志がどこを向いているか」を道徳の要とした。つまり「自分をいかに律し、他者にいかに向き合っているか」という、自らの行いの根底にある基本姿勢(カントの言葉で「【12 \_\_\_\_\_ の格律】」)が矛盾を含まず、広く他と共有できるほどの原則(カントの言葉で「【13 \_\_\_\_\_ 的立法の法則】」)になりうるかを常に自問自答しながら行為するべきだという。自分が避けることを他に強要したり、自分に許

すことを他には許さないような姿勢であれば矛盾しており、普遍的な道徳原則に基づく行為とは言えない。／⑬人間のあり方を考える際に、超自然的な神の支配や意志を前提とせず、物的法則や快苦の有無を中心にするのが【14 論】である。エルヴェシウスは、認識の主たる源泉を実経験の内に求めるロックの発想を基盤にして、「感覚」「記憶」「判断」のすべてが基本的に快を求め苦を避ける感受性に還元されるとした。道徳や公共性の尊重も、自身の快を損ねないための自愛の原理に基づく。快苦という、直接的感覚を生る指針とする唯物論の発想は明快で、実際の行動につなげやすい利点がある。労働者中心に階級闘争による革命行動を説いたのがマルクスである。／[⑬プラス]対立する二勢力に対し、従来の道徳は「公正な裁き」があると考え、キリスト教や哲学等に後ろ盾を求めてきたが、ニーチェは「公正な裁き」ではなく、あるのは自らの力に応じてほしいものを他から得る、という戦いの現実だけだという。ニーチェはある点で、明確な反戦思想であるカントと意外にも接近する。殲滅戦を避け敵と条約を結ぶのが自然な成り行きだと、両者とも考えているのだ。ただしカントは停戦を恒久的な平和にするため「国際連合」成立の必要性を説き、「お互いの人格の完成こそを目的とする」道徳化により戦争をなくすことをめざすが、ニーチェは不安定な均衡を肯定して生きること、今の生のこの瞬間が無限回めぐること(【15 回帰】)の肯定を説く／⑭民主主義が広がり、個人主義的な自由が強調される現代にあって、マッキンタイアは共同体の歴史や相互関係のなかで生きている自分、という視点を「物語の登場人物としての自己」というとらえかたで展開する。基本的に私は「自分が企画したわけではない舞台に立たされ、自分の役ではない演技を受け持たされている」のだが、私は単なる出演者であるだけでなく、自分の人生の「共同【16 家】」でもある。私は出演しつつ、他者との相互関係のなかで物語を作っている。物語において、登場人物の行為が一定の文脈の中におかれているように、私自身が私自身の行為の脈略について説明できることが自己同一性である。そこには、「考える我」を起点とするデカルトにはない、他者や共同体との関係の中で自己を見出す柔軟な視点がある。

### 月曜3講・哲学入門／グループワーク実施・レポート手書き! 提出要項

グループワーク(四回) ① 10/23月 ② 11/13月 ③ 12/11月 ④ 1/15月 (参加点は一回最大5点)			20
レポート用紙 配布日	レポート一次提出期間		おなげき 二次提出期間 (少し減点)
レポート(1) 10/23月	10/30月,11/6月 各講義終了後		11/20月,11/27月,12/4月 各講義終了後 22
レポート(2) 11/13月	11/20月,11/27月,12/4月 各講義終了後		12/18月,12/25月 各講義終了後 26
レポート(3) 12/11月	12/18月,12/25月 講義後・1/15月 講義始		1/16火～1/27土(メール送信) 22
レポート用紙はグループワークの日に配布しますが、提出受付は配布の次週以降です。			配点

※グループワーク当日は遅刻厳禁! 遅刻者は2点減点。残り時間20分未満で入室の場合、欠席扱い(0点)。  
 ※配布するレポート用紙には表側にタスク[あ](哲学・思想史理解)、裏側にタスク[い](グループワーク関連)の二つの課題があります。両方(表側も裏側も)必ず記述すること! 片面だけの記述は受け付けません。

※タスク[あ]は、それぞれのレポートで対象とする範囲が指定されています。  
 レポート(1):第1,2,3,4講座 / レポート(2):第6,7,9講座 / レポート(3):第10,11,13,14講座  
 指定範囲のどれかの講座のエントリーシートにアクセスし、そこに記載された選択テーマから一つを選びます。  
 「せたなべ哲学」ホームページトップで月曜3講・哲学入門をクリックすればエントリーシートの入口があります。

タスク[い]はグループワークに関連したテーマです。(このプリントの裏面でテーマが確認できます。)  
 グループワーク実施日に欠席した場合、設問印刷済の専用レポート用紙をホームページ「せたなべ」からダウンロード・印刷して使用してください。(印刷ができない場合は個人のルーズリーフ等を用いて下さい。)  
 ※レポートは提出期間内(上の表参照)の毎回の講義終了直後に直接渡辺まで提出してください。  
 ただし最終講義日のみ、グループワーク④実施前にレポート(3)を回収します。  
 ※グループワーク①②③実施日は、どのレポートも一切提出を受けつけないので、注意してください。  
 ※レポート(3)のみ、最終講義日までに提出できない場合、メール提出を認めます。※メール送信先は [katsuki6\\_6@yahoo.co.jp](mailto:katsuki6_6@yahoo.co.jp) です。添付ファイルは使用せず、メール冒頭に「講義名・開講日時(哲学入門・月3)・学籍番号・班・名前」を記入のうえ、タスク([あ][い])両方をメールに直接入力してください。受信できたら後日渡辺から受取確認メールを返信します。  
 ※ホームページ「せたなべ哲学」を活用しよう。(GOOGLEに「せたなべ」と入力して検索)  
 講義スライドと同内容のPDFやグループワークの資料、レポートのタスクを公開しています。  
 ※グループワークの参加がゼロの生徒 または 未提出のレポートが一つでも残る生徒には単位は認定できません。

A 君



エントリーシートはレポートのタスク[あ]のテーマだけでなく各講義の着眼点も書いてある。家に帰ったら早速アクセスしてみよう。

B さん



タスク[い]はこのプリントの裏面でテーマの予習ができる。このプリントは毎回もってきてね。なくしちゃだめよ。

C 君



グループワークで当日配布する資料では僕達が対話している。タスク[い]はそれを読んで書いてほしい。

## グループワーク①予習ゼミ 「自然に生きる」とは？

「自然」という言葉は、日々「自然」に口にされるものだと思うが、あえてその意味を尋ねられると、イメージはあってもつかみどころがなく答えにくいのではないだろうか。「人工と自然」という人間と人間以外の環境や動植物に二分する図式もあるが、人間自身の生きる姿勢や本来もっている性質を示す場合もある。「人間」の外に位置づけられたかと思えば、人間の内深くに入りこんでくる。境界線の外に遠ざけておこうとすれば、境界などお構いなしに氾濫する、そうした「自然」について、各自が「自然に生きる」ということをどうイメージしているかを自問自答しながら、考えていくことが最初のグループワークのテーマである。当日配布する対話資料で「自然に生きる」ということについて、A君は「肩が凝らない、できる範囲のことをする生き方」だとするが、Bさんは「理想実現に向かって努力すること」こそ人間の自然本来の性質だとする。C君は、人間にも他の動植物の世界にも共通する自然本来のありかたは「弱肉強食」であるとする。「自然に生きる」ことが、自分にとっていかなることであるかは、自分自身の生きる目標や価値をどこにおくか、他者の存在をどのように考え、環境問題にいかに向き合うか、といった様々な観点を総合的に考えなおすことで、クリアになってくるものではないかと思われる。

## グループワーク②予習ゼミ 「原発を考える」

### ◎日本国内の電源構成の推移

※図4は国(資源エネルギー庁)の発表による2030年の望ましい比率↓



図1 / 2004年

■再生可能	11%
■原子力	29%
■LNG火力	26%
■石炭火力	25%
■石油火力	10%

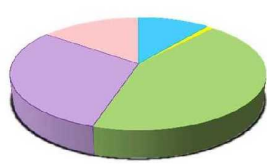


図2 / 2013年

■再生可能	11%
■原子力	1%
■LNG火力	43%
■石炭火力	30%
■石油火力	15%

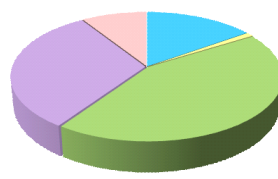


図3 / 2015年

■再生可能	15%
■原子力	1%
■LNG火力	43%
■石炭火力	30%
■石油火力	9%

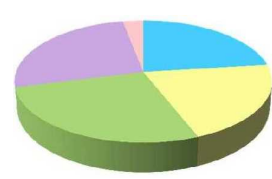


図4(国が描く13年後)※

■再生可能	22～24%
■原子力	20～22%
■LNG火力	27%
■石炭火力	26%
■石油火力	3%

国の方針としては、再生可能エネルギーの比率を拡大しつつ、電力安定供給のため一定比率の原発を確保。

ただし原発依存率は(福島事故前の)約32%から20~22%に「低減」する(2017年現在の2~3%からは大幅増)。

国は「原発低減」を打ち出し、依然根強い原発反対の世論に一定の配慮はしているものの、原則稼働40年で廃炉の方針に従うなら、2030年では14%程しか原発は残らないはず。(現時点で再稼働が見込まれる原発がすべて原子力規制委の審査に通り、地元の承認のうえ再稼働しても15%程の電源シェアである。)2030年時点でも20~22%を確保するなら、原発の新設が必要になる。

国&電力業界が原発を推進する理由は→※火力発電への過度の依存は、燃料輸入に頼る日本には「国富の喪失」となる。／※再生可能エネルギーは供給が不安定で高コスト。原発は「最も低コスト」で電力の安定大量供給ができる。／※原発はCO<sub>2</sub>排出量が極めて少なく、地球温暖化対策の点でも必要である。

…と、国が原発を押し一方で、低コストでクリーンな小水力発電等を拡充し、県内総電力需要のなんと約70%を(従来型水力43%に加え、小水力、太陽光、風力等の)再生可能エネルギーで対応している自治体(長野県)がある。長野県は、コスト削減、環境問題への対応、県内雇用創出と、あらゆる点で、再生可能エネルギーによる発電事業拡大が有効であるとしている。

### ◎原発コスト試算をめぐる問題

「低コスト」と言われる原発だが、立地、建設の費用自体はどの発電よりも高く、計画・建設から採算が合うまで20年にかかるうえに、立地地域への交付金を始め、様々な補助金が運営の前提となっている。国は燃料費中心に「安さ」を強調するが、様々な識者やアメリカ等からは、「日本の原発コスト試算は甘い」と言われている。

アメリカ大手エネルギー調査部門のBNEFは、日本が発表した最新(2015年)の原発コスト試算(10.1円/kWh)に対して「現実的な値でない」と指摘した。ちなみにフランスの原発コスト試算は29.4円/kWh、アメリカは26.2円/kWhである。(朝日新聞2015年9月26日の紙面記事)「LNG火力」は国の最新の試算では13.4円/kWh。

◎原発稼働推進は地球温暖化防止に有効か? 地球温暖化をとめるため、また将来の電気自動車の普及などを見込み、発電時のCO<sub>2</sub>発生が少なく大量発電ができる原発維持を求める声は産業界を中心に根強い。ただし、原発も核燃料の精製や廃棄物処理には大量のCO<sub>2</sub>を放出する。環境省2017年4月14日の発表では、2015年の発電所由来のCO<sub>2</sub>排出は、原発稼働率の高かった2005年より23.3%削減できている。(2013年に対しても19.5%の削減。再生可能エネルギーの伸びが原因か?)原発稼働率とCO<sub>2</sub>排出量削減との間の因果関係は必ずしも明らかではない。

## ◎すでにある原発や、原発立地地域の今後をどう考えるか

近畿地方で原発のある場所を知っているだろうか？実はどこにもない。関西電力管轄の原発はすべて福井県若狭湾沿岸に集中している。「原発はあるから使わないともったいない」という理由で再稼働に賛成する人は多いが、「原発は遠く、何かあっても直接被害は受けないから」と軽く考えてはいないだろうか。原発再稼働への少なからぬ賛成の世論と裏腹に、リスクを分かち合う意識は我々には少ない。その証拠に、福島事故で発生した放射性廃棄物を受け入れる自治体がほとんどなく、結局福島地元での受け入れとなった。廃棄物の最終貯蔵地になることで、避難している人々が戻りにくくなることを福島の人々は心配している。福島だけの問題ではなく、各原発内にある廃棄物は飽和状態に達しつつある。「原発をなくしたら、そこで働いている人が困る」「地域振興のために原発は必要だ」という意見もあるが、原発は原則40年で廃炉になる。福島の事例からすると、福井も核廃棄物貯蔵地になる可能性は低くない。川内原発の地元の薩摩川内市では、かつて農業中心に都会からの移住を促す事業を推進していて、一定の成果を上げていたが、福島事故後、移住者はパタリととだえたという。原発立地地域は、原発を抱えているがゆえに、新たな産業を興したり移住者を呼び込む自助努力がしにくい状況にあるのも確かなのだ。原発立地地域住民は、再稼働賛成反対に関わらず、安全性や地域振興の点で、リスクとハンディを負っている。

### グループワーク③予習ゼミ 「大学(生活)の今と未来」

大学をめぐる状況は年々厳しさを増している。少子化によって大学側が生徒数を確保するのに苦労していることもあるが、大学生の皆にとっても卒業後の進路を考えるうえで楽観できない社会の状況がある。大学卒業後に初めて就職した際に非正規雇用者となった大学生の割合は(2007年10月~2012年9月の統計で)男女平均で約4割、特に女性は5割に達している。(皆の親御さんに近い世代が大学生だった)1980年代と比べると大卒非正規雇用者の割合は男性で3.6倍、女性で2.6倍に増えている。その状況のなかで、あえて高い学費を払って大学に来る、ということは「社会人に仲間入りするためのアピールポイントを身につける場」として大学が期待されているということであろう。国や産業界からは、産業界の利益につながるような研究促進および人材育成、いわば「産学連携」といわれるありかたが以前にもまして求められている。「産学連携」が形になりやすいのが具体的な産物や臨床結果というアウトプットの出せる理系学部であることから、大学の学部拡充や予算の配分、また学生からの注目が理系に集中しがちな面があるのは否めないであろう。「社会に役立つ知見」という点で理系と文系の「役立ち方」にはそれぞれ違いがあることを見逃してはならない。例えば、情報化社会と言われる現代にあり、インターネット等の情報伝達手段を整備するのは理系の役割であるが、ネットを通じて検索サイト等が集積したビッグデータを誰がどのような目的で使うことが許されるか等の法的、倫理的問題を扱うのは文系の役割である。「産学連携」は確かに大切だが、「文理連携」や社会的問題に関心のある市民が参加できる「開かれた大学」を模索することも必要ではないだろうか。

(大学は職業教育の場か？ by 本田由紀氏[東京大学大学院教授]) 近年、新卒一括採用に乗れない若者が一定数出て来るようになりました。この結果、(まるで)赤ちゃんのままで地べたに投げ出されるような人も出現しています。彼らには仕事の世界に「適応する力」、つまり職業的な知識・技能を育む教育が求められています。さらには適応力だけでなく、問題のある働かせ方にノーと言いは正してゆける「抵抗する力」も育てなければなりません。…現状では、大学教育の職業的意義を高めるという課題がはかばかしく進展していないのは事実です。しかし[知識・技能を]アカデミック(学問・学術的)と実学に二分することなどできるのでしょうか。青色発光ダイオードのように、研究としても実学としても意義深いものがあります。アカデミックな教育も実学の要素を持っており、その逆もまたしかりです。大学教育が教養や人間力といった抽象的な目標ではなく、具体的な知識やスキルを形成しようと努めることは重要ですが、過度に実践的なスキルだけに振れてしまうこともまた不毛です。(週刊「東洋経済」2015年1月31日号より編集抜粋)

(参考・大学の歴史(第十講座))大学の始まりは、十二世紀イタリアで、主として北欧からの放浪学者が「学生団」として教師を雇ったところにある。放浪学生団は、印刷術のない当時では幅広い各地の情報を伝え、広い視野を提供する者として、国から必要とされる存在となり、税の減免や移動の自由を保障される等、様々な特権を与えられる形で大学へと発展していく。当時のヨーロッパは人的物的資源の交流が活発化し、ネットワークの広がりに対応した都市秩序構築、法整備が急務となり、それを担う学問研究が、広範なネットワークをもつ自由民である放浪学生団に期待されたのである。十四世紀頃までに国からの財政支援拡大によって大学の学部組織が安定してくると、移動は制限され、カリキュラムが固定的になる。一方、印刷術の発達で本が普及し、自由な学問研究を求める人々は大学から離れ個人で読書したり、私的研究機関に所属するようになる。(参考・カントの大学論(第十一講座))大学は国に有用な学問を担う上位学部(神学部[教会充実のため]、法学部[国家秩序のため]、医学部[公衆医療のため])と、政府や権威から距離を置いて、上位学部に提言を与える自由をもつ下位学部としての哲学部から成るのが理想であるとカントはみなす。ここでいう「哲学部」とは単に哲学史を学ぶ学部ではなく、数学や自然科学や人文系諸学を総合的に吟味する、「自由な視点、批判精神」に立つ学部である。大学の起源が「自由な立場にある」放浪学生団を「国家の役に立つ」視点を提供する者として保護したことにあることを考えると、「自由な視点と国家にとっての有用性」という往々にして矛盾しがちな二面性をもつものが大学の特性だと言える。「哲学部」創設まではせずとも、国や世論が一方にふれすぎる際に、距離を置いて冷静な批判、建設的な提言をするのも大学の重要な役割ではないだろうか。